

三百年の伝統 備中名物 成羽愛宕大花火

宝永元年(1704)成羽藩後期山崎二代藩主山崎義方の江戸屋敷が愛宕下にあり、尊崇していた愛宕神社を成羽の愛宕山頂に勧請し、白谷堤にて花火を奉納したのが愛宕花火の始まりと言われています。火薬調合の大砲方は『流星奉行』と称えられた。愛宕花火秘伝の基は「カラクリ」にあった。毎年「大カラクリ」三つ位が仕組み、大導火によって一瞬にして構図前面に点火する法であった。構図は専門の絵師が下絵を描き、大規模で大変華やかなものであった。

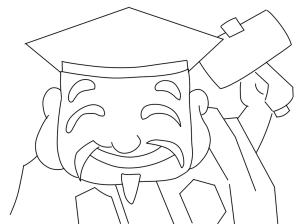


山崎氏家紋

その他「ホタル」・「サクラ」・「シャグマ」と呼ばれる仕掛もあったという。揚花火は尺玉ほか大小無数で、尺玉が一度空中に開くや町中真昼間の明るさを呈した。花火に集う観覧者は老若男女、遠近を問わず多数が集まった。藩主は堤に陣幕を張った座敷で観覧、家中藩士達は縄張りを設けてその内側に、その外側に、たという。

成羽愛宕大花火の特長

- ①江戸時代より300年以上続く伝統があり
- ②成羽町民による手造り奉納花火であり
- ③流星奉行に受け継がれた秘伝の仕掛花火(昔はカラクリと言った)があります。



えっ！これが仕掛花火？

300年の伝統、成羽の名物の仕掛花火(カラクリ)です。毎年の流行を題材に20基以上の仕掛花火(最大9M×9M)が河原に並びます。絵柄は毎年の楽しみです。

どうやって作るの？

ほとんどが町民による手作りです。題材選び、図面書、下絵書、木枠作り、取付け、かたづけまで町民のボランティアによって行われます。

流星奉行(りゅうせいびぎょう)ってなあに？

今から約300年前の江戸時代に、成羽藩主の山崎候のはからいで、年に一度家中の若者が鉄砲等の火薬の再利用で「カラクリ」などの花火を造り、愛宕神社に奉納し民衆を喜ばせていた『粋』なやつらが「流星奉行」です。今では花火に関わる人を総称して「令和の流星奉行」と言われています。

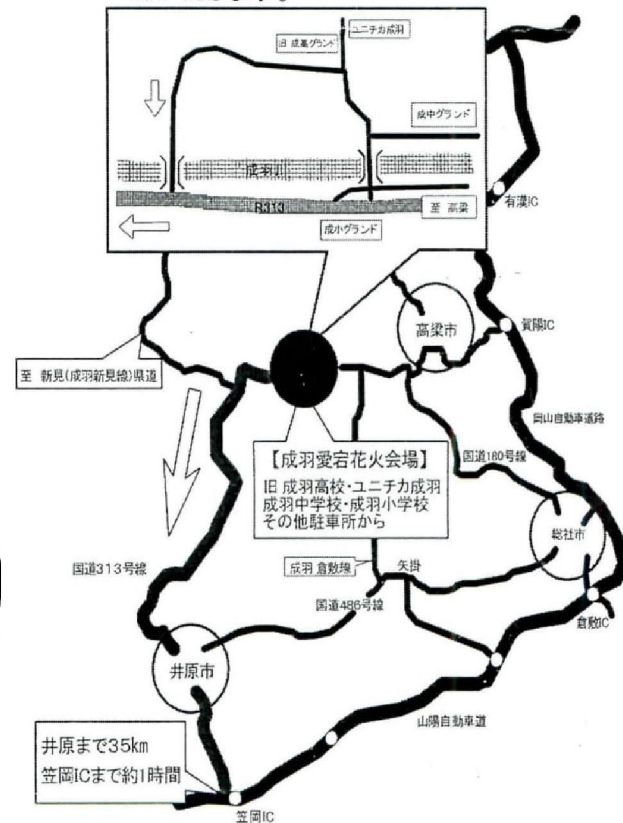
高梁・新見方面へお帰りの皆様へ！

国道313号線は、大変混み合います。神楽街道を利用し川面方面から帰られることをお勧めします。



岡山・倉敷・総社方面へお帰りの皆様へ！

高梁方面へは大変混み合います。井原方面から帰られることをお勧めいたします。



成羽愛宕大花火実行委員会からの注意事項

会場周辺は大変混雑します。ガードマン、消防団等の誘導に従いゆっくりお歩きください。通路、坂道、橋の上では立ち止まらずにすみやかに通過してください。危険な場所には立ち入らないでください。ドローン撮影は禁止します。

成羽愛宕大花火はすべて町民のボランティアによって運営されている手造り花火大会です。公的駐車場整理料、有料観覧席整理料は、すべて花火大会運営費用となっています。しかし、町民のボランティアだけでは、予算削減、高齢化、過疎化などで最近、運営が難しくなってきました。成羽愛宕大花火の更なる発展と維持のために協賛金のご協力をお願い申し上げます。何卒、皆様のご理解とご協力を重ねてお願い申し上げます。

